

## 陰陽五行論 (2)

### 五行とは

五行とは、木火土金水もくかどきんすいという、「天」と「地」からもたらされる五つの作用の総称である。太極より天地が分かれ、物が存在することになった後、五行が生じたとされている。人はこの世に生を受けた瞬間、五行の「気」を受け、また、誕生後も五行の気のめぐりの中で生き、生活していると考えたのである。

殷墟いんきょから発掘された甲骨文じゅうこつぶんの研究によると、四季によって方向が変化する風に気候をつかさどる神霊が存在するという信仰に基づき、東西南北に中央を加えて五つの神を祀り、四季の巡りを順調にしようとしたことに由来すると言われている。

また、木もくと聞くと、ほとんどの方は樹木を連想すること

と思う。それは的外れとは言えないが、陰陽五行論においていう木は、樹木そのものではないことを理解しておかなければならない。陰陽五行論は、四季の循環の中における森羅万象の性状・特質を極限まで単純化し、五つに分類したもので、樹木の意は、五行の木の一つの象意でしかないのである。このことは、火、土、金、水においても同様である。

五行は、元々は四季の循環を記述するための符号であったが、時代を経るとともに、抽象化され、多くの事象につながる意味・作用が仮託されると共に、その関係が法則化されて行き、相生、相剋という相互作用が付加された。

木は火を生じる。木が火を生じることにより火は強められることになる。同じく、火が土を生じることにより土を強め、土が金を生じることにより金を強め、金が水を生じることにより水を強め、水はまた木を生じ木を強め、一巡する。そして、生じる方は、その「気」を消耗する。

木は土を剋す。木が土を剋すことにより土を弱め、土は水を剋すことにより水を弱め、水は火を剋すことにより火を弱め、火が金を剋すことにより金を弱め、金が木を剋し

て木を弱め、一巡する。そして剋する方もその気を消耗する。以上を図示すると次のようになる。

(フレームの同じボタンをクリックしてください)

## 相生の図



## 相剋の図



最終更新  
2000  
・  
1  
・  
16